

- 1 派遣期日 平成23年10月10日（月）
- 2 研修先 会場名 日本学校心理学会 第13回大会（信州大学教育学部）
所在地 長野県長野市西長野6のロ
- 3 研修内容

大会テーマ

みんなが資源、みんなで支援

支援のさらなる充実へ向けて ―学校心理学からの発信―

（1）ポスター発表

対人関係、不登校、関係機関との連携、学級集団、特別支援などのテーマごとに、学校心理学という側面からの支援のあり方を探る調査研究・実践研究が55本発表された。発表は、学校現場のみならず、大学の研究機関、医療機関、支援センターなどと連携したものも多く、全国各地で今、取り組まれているさまざまな実践が集まっていた。

「通常の学級における児童同士の相互援助」 大阪大学大学院 池谷航介先生

【実践の概要】

自閉傾向のある児童に対して、周囲の児童のどのような関わり方をしているのかを観察した結果、「サポートが適切な児童」「あまり関わろうとしない児童」の他に、「関わろうとするが、サポートが不適切な児童」が見受けられた。そこで、サポートの不適切さのみを指摘するのではなく、関わろうとしたことを肯定的に捉え直し、評価した上で助言するというアプローチを試みた。

【事例】

B児は自閉傾向のあるA児に対し、常同的な言葉に腹を立てたり、無理に集団に戻そうとする行動が見られた。A児は、その関わりに対して気持ちを落ち着かせることが難しく、座席や活動班を離すなど回避的な対応が取られてきた。そこで、A児に関わろうとしたB児の評価を行った上で、その都度適切な関わり方を助言した結果、B児のA児に対する口調や行動に変化が見られた。B児もA児の指示で落ち着いた行動ができるようになり、他にもA児に関わろうとする児童が増えてきた。

【実践から】

特別支援や不登校など課題のある児童に対して、関わろうとするがサポートが不適切な児童に教師が介入（評価）することで関わり方が強化されることが分かった。また、あまり関わろうとしない児童群にもその関わりが広がり、サポートが適切な児童よりもモデリングが強まることも分かった。

教師が周囲の児童に対して関わり方を肯定的に評価していくことは、通常の学級において児童同士が相互に援助していく一つの方向性を示している。



(2) 教育講演

「不登校支援から登校支援へ―いじめ・不登校を予防する学級集団づくり―」

昭和女子大学 岸田 幸弘先生

【不登校の現状と視点の変化】

中学1年で不登校になった生徒の半数以上は、小学校高学年で長期欠席を経験している。「中一ギャップ」と呼ばれ、全国的に課題となっている。また、新たな課題として、発達障害から不登校になるケースも増加し、対人関係の困難、周囲の不理解などが原因と考えられる。不登校問題を考えるとき、単に「学校復帰や予防」ではなく、「いかに生きるか、どのように進路を開くか」というキャリア教育の推進に視点が変わってきている。また、不登校は友人や教師との関係の中で起きる問題として捉え、「居場所づくりから、絆づくりへ」と取り組みが変化してきている。

【不登校支援から登校支援へ】

日常のすべての教育活動である登校支援（0次の支援）をベースに、成長促進（開発）的支援（1次の支援）、予防的支援（2次の支援）、問題対処（治療）的支援（3次の支援）を段階的にではなく複合的に行っていくことが求められている。そして、環境改善的発想のもと、学習、学級集団、先生、親との関わり合いの中で、「今、ある姿を少しずつ変えてみる」というスタンスでの支援の仕方が取り入れられている。さらに、学級集団をいかに作っていくかが登校支援につながっていくと考えられる。

【人間関係を育てる学級集団づくり】

学級集団の中で、児童同士の関係や児童と教師の関わりを育むことが大切である。教師も学級集団の一員であり、教師との関係が登校に大きく影響することを意識する必要がある。教師は、対話のある授業を心がけ、「〇〇さんの考えに付け足します」「休んでいる〇〇さんなら、こう考えると思います」など、自分に対してリアクションがある雰囲気が見え一人一人の学級での存在意義につながってくる。また、学級集団における人間関係づくりのための教育技法として、体を動かしながら遊び的な活動を通して関係づくり（交流）を深めていく「対人関係ゲーム」が提唱されている。

対人関係ゲームの分類と内容

課題	どんな体験ができるか	代表するゲーム
人と楽しむ	①交流する	ひたすらじゃんけん、じゃんけん列車、フルーツバスケット、探偵ゲーム、木とリス、進化ゲーム
	②心を通わす	わたしの木、いいとこさがし、ユアストーン
人と協力し連携する	③協力する	こおり鬼、あいこじゃんけん、人間知恵の輪、パースデーチェーン、手つなぎ鬼、人間いす、
	④役割分担し連携する	くまがり、とっつぁんとルパン、二人で缶蹴り
	⑤折り合う	新聞紙タワー、二人でコラージュ

4 感想

今回の研修で、全国各地の小中学校の取り組みだけでなく、大学や医療機関等との連携のもとに行われている実践に数多く触れることができた。日々の教育活動の中で、どうしても眼前の課題にとらわれがちだが、現在の支援の在り方の方向性や、県内外各地のさまざまな取り組みを知ることによって、対応すべき課題を俯瞰的に捉え、新たな光を見出すきっかけとなった。

今後は、児童の学校生活不適應の解消や生徒指導上の諸問題を未然に防止するために、学校生活の機能と活力を支えるという学校心理学の考え方に立って、支援のさらなる充実のために研修に努めていきたいと思う。そのために、学級担任として、生徒指導主事として、「児童のために今、何ができるのか」を考えながら、日々の実践に励んでいきたい。